

川/舞台

k97021 大久保順子

設計主旨

*レクイエムとして

大井川は、急流で危険の多い大河であった。「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と馬子歌でも歌われているように、江戸時代の大井川は、東海道最大の難所として恐れられるほどであった。そのため、この川越で命を落としたものも少なくなく、また、地元の川越人足（川越する旅人を手助けする者）たちも命がけで旅人の足となり、時には旅人とともに命を落としたであろう。その一方で、島田宿は川留により賑わい、発展した。島田にとって川越の歴史は重要なもので、忘れてはならない歴史であるといえよう。そこで、ここで亡くなった旅人や人足の霊を祀り供養する意味で、能舞台の制作を思い立った。また、それにより、川越の歴史が住民の心に継承されることをねらいとする。

*新しい文化の構築

川越制度廃止の後、木材関連産業が発達したが、現在の島田には独自の文化がない。そこで、ここに能舞台を設け、能を島田の新しい文化にしようと考えた。従来の能舞台のスタイルを打破し、新しいスタイルを島田のオリジナルとし、文化として根付かせたい。オリジナルスタイルとは、1) 舞台を川の上に配置したり、2) 様々な視点で観能できたり、3) 演能の構成（能一番・二番、狂言一番）を活かし、3つの舞台を用意するなど。

*地域の活性化

現在の町並は、大井川で行き止まりになっている。今回の計画で、能舞台を川の上に設け、舞台と町並を橋で結ぶことにより、行き止まりから解放され、人の流れが活発になると考えられる。三舞台構成もまた、回遊性を生じさせ、人の流れを作る要素となる。更に、舞台のある空間は、能を演じたり観るだけでなく、普段は、人々が集まれる憩いの空間ともなるよう工夫されている。活気の失われた町並に、再び息を吹き替えさせる効果を望む。

*日本伝統文化の普及

国際化の時代において、自国の文化を知ることが要請されている。それと同時に、日本人の伝統文化に対する無知を指摘されている。日本人が伝統文化から離れてしまうのは、伝統文化というものが格式が高く、取っつき難いという先入観が強いからだろう。従来の形式にとらわれない能舞台の制作により、この先入観から抜け出し、もっと身近なものであることに気づかせ、伝統文化に興味を持つ第一歩に繋がればよいと思う。

効果

敷地

■静岡県島田市河原1・2丁目 + 大井川

歴史・・・もともと農村として発展してきたこの地域は、江戸時代初期、宿駅伝馬の制が定められ新しい都市形成を見せた。西端の大井川では、渡船・架橋を禁じられていた為、流れが急で慣れない旅人には危険が大きかったが、歩いて渡るほかなかった。そこで、川越の手助を職業とする者が現れた。参勤交代の諸大名や一般旅行者などによる交通量の増加とともに、渡渉の順番や料金の統一などの管理に必要性が生じ、元禄9年（1696）川越が制度化された。それに伴い川越機能を果たす様々な施設が設置され、川越町並を形作った。

現在・・・川越町並が高く評価され、昭和41年8月1日に国の史跡、島田宿大井川川越遺跡の指定を受けた。川会所（川越の料金を定めたり、川札を売ったりした役所）や番宿（川越人足の集会所）など当時の町並が保存されている。しかし、未だに的確な整備がなされず、厳しい規制により住民には不便が生じ、この地を離れる人も少なくない。川留めで賑わった頃の活気は失われた。

川越遺跡町並

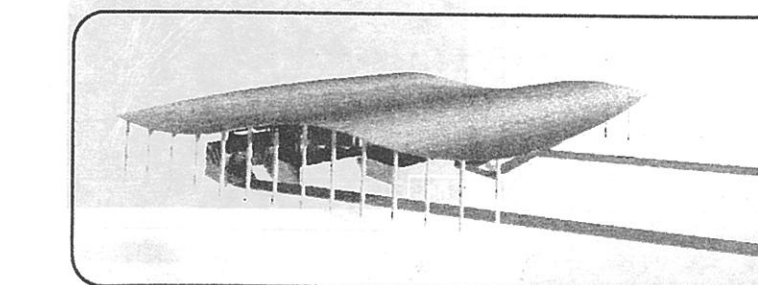
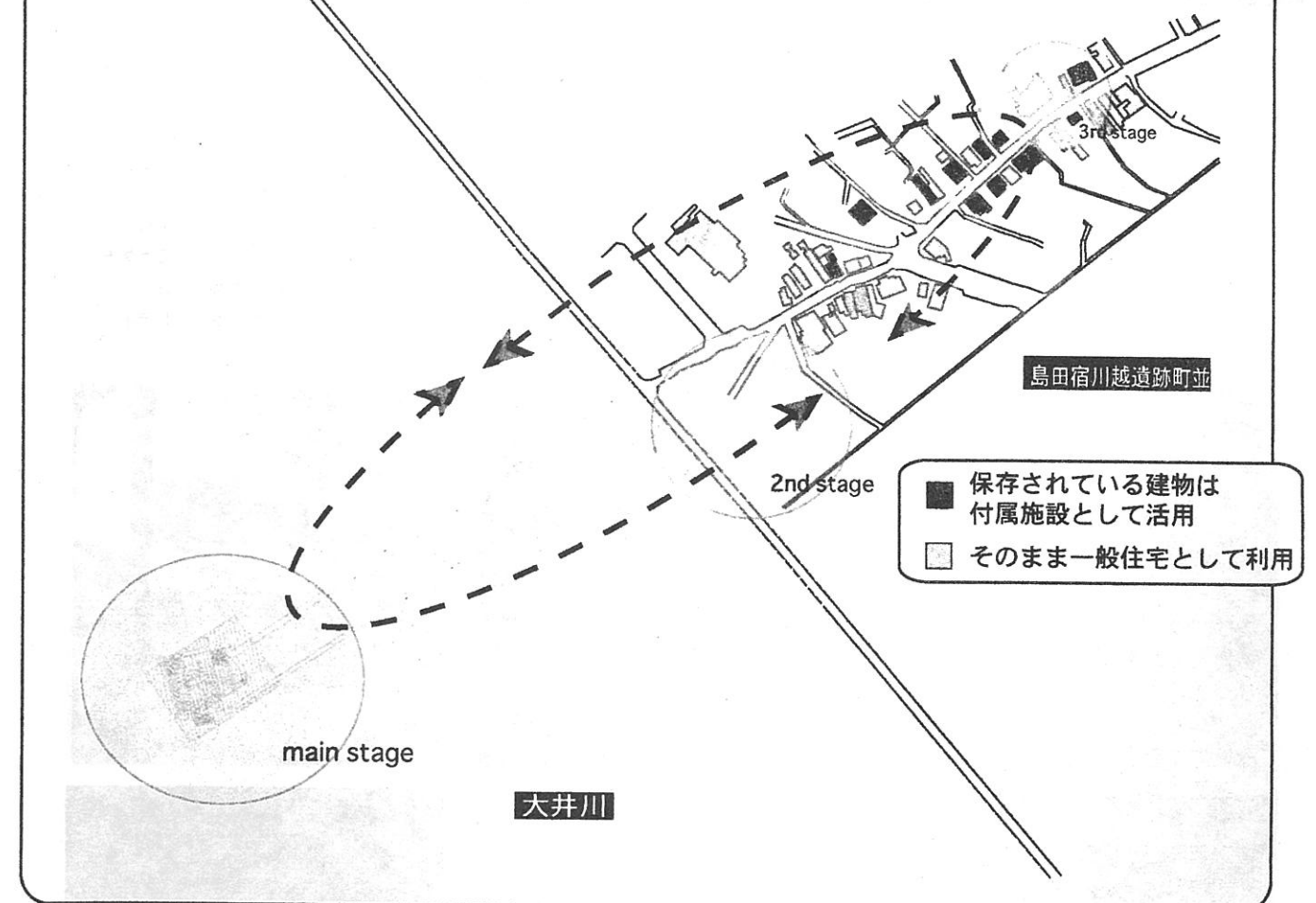


大井川

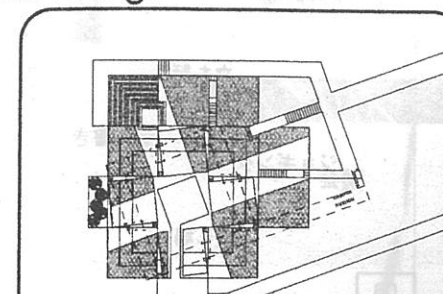
三舞台構成

main stage ↔ 2nd stage ↔ 3rd stage

*回遊性、停留性を持たせる



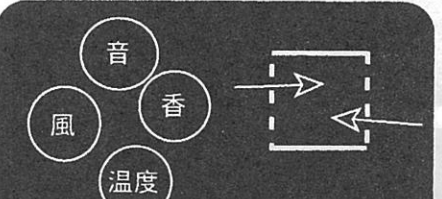
main stage



1/1500

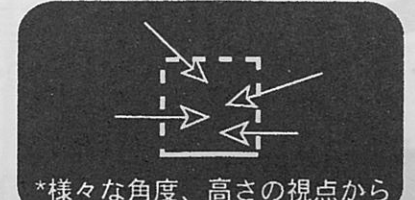


本来自然の中で演じられるものであった能を再び自然の中に解放する。



*自然の中で、自然を感じながら

視覚、体感で楽しませる。



*様々な角度、高さの視点から